

大崎、夜明けの時を辿って。【都市再生編①】

“まっ暗”から、曙の空へ、突き抜けるOSAKI

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『おおさき今昔物語』。

その第三十五話は、“大崎真っ暗”と揶揄された灰色のまちのイメージ色濃かった時代から、曙の時代へ、都市整備に基づいた大崎再生への歩みを辿ります。

高度成長の歪みが表面化する中で活気を失い始めた大崎のまちに、夜明けの明りをもたらした市街地再開発の動き。目覚ましい発展を遂げる副都心大崎の草創の歴史が、そこにありました。

再開発前の大崎

大崎まちづくりへの歩み

江戸時代	品川宿が繁栄し、これに向けた食料供給地として、目黒川畔に水田が形成される
明治初期	明治政府の殖産興業化で、大崎へ工場進出が始まる
明治後期	日露戦争以降、目黒川畔への工場進出が顕著に
大正後期	関東大震災の被災地から品川区に人口、工場が集中
昭和初期	多くの田畑や宅地が工場の敷地となり、「まち」へと変貌
昭和30年代	急激な経済成長で大崎は有数の工業地帯へ
昭和40年代	品川区への過度の人口・産業集中で公害が問題化
昭和51年	公害対策をにらんだ「品川区長期基本計画」策定、「住宅と産業の調和のとれた緑豊かな近代都市」へ取り組み開始
昭和57年	東京都長期基本計画策定（大崎副都心の指定）
昭和62年	東口第1地区（大崎ニューシティ）竣工、その後、大崎駅周辺地域の再開発が進む
同年	同地区にて「しながわ夢さん橋」イベント開始
平成19年	「大崎駅周辺地域都市再生ビジョン」策定（H16年）に伴い、「大崎エリアマネージメント」誕生
平成20年以降	大崎駅周辺地域の街区整備と地域イベント等により、大崎の活性化が進む

地元の需要に応える各種店舗を始め、駅直結の〇歩道橋や〇パティオなど、様々な都市機能を備えた大崎ニューシティ。その後、大崎駅周辺の街区整備や「しながわ夢さん橋」イベント開催等の胎動により、「人とまちをつなぐ大崎」の活性化が進展していきます。



昭和62年、大崎駅東口第1地区（大崎ニューシティ）竣工当時の大崎駅周辺。東口第2地区（ゲートシティ大崎）がまだ建設される前、その姿は、大崎のまちに明かりを灯して導く燈台のよう。



都市再生の第一歩。竣工式当日、地元の人々を招いた〇歩道橋での「渡り初め」

切り開いていったのでした。（当編続）

その後、平成10年の東口第2地区（ゲートシティ大崎）の竣工や、西口エリアの各再開発事業の進展に伴い、大崎は正に目覚ましい「曙の時代」を切り開いていったのでした。（当編続）



昭和30年代、日本初のトランジスタラジオや家電製品の開発製造等により、高度なハイテク企業のまちとして成長する大崎も、昭和40年代に入ると過度の人口・産業集中による公害が問題化。さらにその後の地価高騰や工場老朽化等による工場移転も多発し、跡地利用の無秩序化が目立ち始めます。こうした状況打開に向け、昭和51年「品川区長期基本計画」に支えられた新しいまちづくりへの胎動が始まったのでした。

秩序と先進のテクノスクエアへ。大崎副都心への勇躍へ。昭和、平成の時代、光を追い求めた時へ

飛翔、再生へ

